

ポッタリチャンサ
——日韓境域を生きる越境行商人——

井出 弘 毅*

Boddari Jangsa:
A Preliminary Study on the Peddlers Crossing the Japan - South Korean Border

IDE Kohki *

The purpose of this paper is to draw an outline of cross-border movements of the Korean-Japanese peddlers called *Bottari Jangsa* based on the related studies.

Bottari Jangsa means “a merchant who carries and sells goods wrapped in cloths on the back”. The characteristics of the *Bottari Jangsas* who travel between Japan and South Korea are as follows: 1) they do not have a store and circulate commodities between Japan and South Korea; 2) their customers are limited to retail traders; 3) they temporarily stuff the commodities into their used carry bags in order to reduce or evade the customs duties; 4) they remove the packages from commodities and throw them away in order to lighten the weight of their carrying baggage.

At the same time the *Bottari Jangsas* transmit various information from South Korea to Japan and vice versa. The information includes, for instance, the latest popular commodities among Japanese and South Koreans, the marriages or marriage meetings of their relatives, and the most reliable fortune-tellers to date, or else.

The preceding studies have pointed out that the Korean-Japanese *Bottari Jangsas* have decreased in number, while the numbers of the South Korean *Bottari Jangsas* have increased on the contrary. I have examined some reasons behind this phenomenon based on the field research. Meanwhile, this paper aims at describing the translational aspects and its changes of the *Bottari Jangsas*.

キーワード：ポッタリチャンサ，行商，日韓境域，在日韓国人

Keywords: *Boddari Jangsa*, Peddlery, Peripheries of South Korea and Japanese, the Korean Japanese

* 東洋大学アジア文化研究所客員研究員；Visiting Scholar, Asian Cultures Research Institute of Sociology, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112- 8606/ mn6ca3@fiberbit.net

はじめに

1 本稿の目的

ポッターチャンサ (보따리 장사) とは、「ふろしき包の担商 (かつぎあきない) , 振り売り商売・商い」を意味する言葉である。こうした商売を行なう人々の呼称については、先行研究の中にいくつかのバリエーションを見ることができる。すなわち「かつぎ屋の旅客, ”カンカン部隊” ならぬ担ぎ屋, かつぎ屋, 国際かつぎ屋さん, ポッター・ジャンサ, 国際かつぎ屋部隊, 担ぎ屋のおばさん, ポッターさん」[高島 1998: 177] である。また、「通称『ぶったりばあさん』のところで手伝うことになった。この人は、店から服地を買って縫い子に洋服を作らせ、背負って売りに歩く、つまり『かつぎやさん』だった。ばあさんといっても、当時 50 歳くらいで、それほど年はとっていない」[斉藤 1994: 82] との記述もある。詳細は明らかではないが、この「ぶったり」はおそらくはポッターの変化したものであろう。さらに原尻 [1989: 124] は「韓国と日本を往来する運び屋も在日朝鮮人独特の職業である」と述べ、ポッターではなく「運び屋」との呼称を用いている。他に新聞において用いられていた表現としては、「韓国担ぎ屋さん」[読売新聞 1992 年 10 月 19 日] , 「国際行商おばさん」[読売新聞 2001 年 9 月 8 日] がある。

後述するように、現在、ポッターは日韓間のみならず韓中間、韓口間にも広く見られるが、本稿では対象を日韓間を往復するポッターチャンサに限定する。本稿の目的は、今後行なう予定であるポッターチャンサの実態調査のために、先行研究から対象の概要を描き出すことである。

ポッターチャンサ (以下、ポッターとも略称する) に関する先行研究としては、高島淑郎 [1998] による「関釜フェリーの『ポッター』について」と、島村恭則 [2000, 2002] による「境界都市の民俗誌——下関の<在日コリアン>たち」, 「在日朝鮮半島系住民の生業と環境——ポッターチャンサ(担ぎ屋)の事例をめぐって」がある。

高島は、研究目的として「『ポッター』さんの生活相を紹介し、同時に市井の人にとっての日韓交流は何かを考えてみたい」[高島 1998: 175] とする。そこで日韓間の「『ポッター』さん」の定義や歴史を概観し、新聞資料などから「『ポッター』さん」が扱う品物の変遷を提示している。また「『ポッター』さん」の一例として、1996 年に 65 歳の「『ポッター』さん」が下関で品物を購入し釜山で販売した記録を、特に収支の点に絞って紹介している。

1) 本稿は、2008 年 7 月 26 日に東洋大学において行われた東洋大学アジア文化研究所プロジェクト『境域アジアのトランスナショナル・コミュニティ——地域間比較研究の定礎に向けて』および『白山人類学研究会』共催の研究フォーラム「東アジアの境域研究—済州人のトランスナショナルリティを中心に」における報告に、加筆・訂正を加えたものである。

一方、島村は、「在日朝鮮半島系住民の世界は、これまでほとんど表象されてこなかったものであり、また、仮に表象されることがあったとしても、それは結局は上記〔①差別そのものとしての表象、②無表象、③被差別客体としての表象、④コスモポリタンのポテンシャルとしての表象——筆者注〕のどれかに回収されてしまうという問題」を指摘し、「無知が引き起こす誤解を回避するためにも、在日朝鮮半島系住民をめぐる日常生活の民俗誌的研究が要請され」ており、「こうした課題への取り組みの一環として」ポッターリの研究を行なうとしている〔島村 2002: 4〕。島村の研究〔島村 2002〕は、関釜フェリーのポッターリたちの2001年における現状について、当事者の発言を多数引用しつつ紹介している。すなわちポッターリの歴史や生活スタイル、ポッターリをする理由、ポッターリが運ぶもの、ポッターリの行程などについてである。また関税に関する税関側とポッターリ側の証言や、本国の韓国人のポッターリの増加、大阪におけるポッターリの様子などについても紹介している。

両者の視点は異なるが、それぞれに興味深い成果がある。高島の論文ではポッターリについて一通りの解説がなされているが、どちらかと言えば数字や品目といったモノが中心であり、直接的に人々の具体的な姿を表すものではない。しかし1996年当時までの状況についての具体的な数字や品目の記録は、以後の状況との比較のための材料となるものであり大変貴重である。それに対し島村の論文では、5年後の2001年当時の状況について、ポッターリなどの語りを多く紹介することにより、その姿を描いている。しかし、高島のような具体的な数字や品目などについての詳細なデータの提示は見られない。またこれは両者にも言えることではあるが、様々なケースをそれぞれ簡潔に紹介するにとどまっており、一人ひとりの具体的な姿を描くものとはなっていない。だからと言って、こうした研究に意味がないということではない。いわば研究のタイプの違いでもあるし、何を明らかにしたいかということによる違いでもある。それゆえ、両者の研究は相互補完されることにより、より良いものになると考える。

こうした先行研究のあり方を受けて、本稿では日韓間のポッターリの現状について、先行研究以後の状況を踏まえた上で基礎的な考察を行なうものである。それは今後予定している日韓間のポッターリに関する調査の基礎的研究として位置づけられよう。

2 ポッターリチャンサの特徴

日韓間のポッターリチャンサの特徴は、(1)日本と韓国の間で品物を流通させる店舗を持たない個人商人であること²⁾、(2)「販売先を個人ではなく小売り業者に限っている」こと、(3)「関税軽減のため『商品』を〔中略〕『(船上において一時)使用済みの携帯品』に変身させる」こと

2) この点においては、いわゆるハンドキャリーサービスやオンボードクーリエとも似ている。ポッターリの場合、主に個人が主体ではあるが、中には数人のポッターリが共同で行なうこともある。

である[高島 1998: 175]。3つ目の特徴について補記すると、大量の商品を荷物の中に忍ばせる場合、パッケージ入りのままだととも本人の携帯品とは言えないため、そうしたことが行なわれるという。ただし異なる説もある。それは、「少しでも多くの品物が入るように、かさばるものは、品物をケースから出してしまい、ケースは捨て、中身だけをかばんにつめこむ」[島村 2002: 5-6]という説である。単純にパッケージを捨てることにより、商品の軽量化を図ると同時に体積を軽減するということである。これらの説はどちらかというよりも、おそらくは両方とも正しいと言えるのではないと思われる。しかしながら、品物によってはパッケージが廃棄されない場合もある。箱買いした韓国ノリやインスタントラーメンなどはダンボール箱のまま持ち込まれている³⁾。

ここでポッタリチャンサと朝鮮の伝統的な行商人とを比較してみたい。朝鮮半島には、歴史的に重要な役割を果たしてきた「褌負商(ポブサン)」と呼ばれる行商人がいた⁴⁾。これは褌商(ボサン)と負商(ブサン)とを合わせた総称である。褌商とは、主に技術的に発達した精緻な細工品や値段の高い奢侈(贅沢)品などの雑貨を扱った。例えば比較的高価な筆墨、金・銀・銅製品などであり、これらを風呂敷に包んで背負い、通いながら販売した。そのため「風呂敷包み商人」とも言う。他方、負商とは、木器・土器などのような粗雑な日用品など家内手工業品を商品とし、背負子(チゲ)に背負って通いながら販売した行商人である。それゆえ「背負い(担ぎ)行商」と言われる[韓国精神文化研究院編集部 1991: 795]。

これらの商人は、「おおよそ1日に往復できる距離を範囲として形成される市場」[鄭 2002: 107]を回りながら各地の物貨を流通させた。また、この褌負商は単に品物を運ぶ商人というだけにとどまらない。よく映画やドラマにもその活躍が描かれているが、朝鮮時代には国家の大事や国難危機の時には褌負商を使役したように、政治的にも利用されるほど、そのネットワークと組織の役割は重要であった。

ポッタリチャンサの場合、風呂敷包みという名称からすると褌商のようにも見える。ポッタリは安価な日用品を中心に運ぶというイメージもあるが、後述する通り、扱う品物はその時々によりかつ流行によりかなり変化するものであるため、一概に言うことはできない。しかしながら比較的安価なものを扱うポッタリが大多数であることから、むしろ負商の方に近い存在なのかも知れない。ただし、「褌商にはたいてい家があり、家族と離れてひとり市場をまわることが多い」[鄭 2002: 114]のに対し、「負商は結婚せず家族がないことが多く、また家族

3) 2005年7月18日放送された日本放送協会「ホリデーにつぼん 海峡に継がれる思い——在日3世代の関釜航路100年」より。

4) 「褌負商」という名称は日本による植民地時代に朝鮮総督府が強要したものであるとの指摘が韓国でなされており、正しくは「負褌商」であるとしている。京畿大学経営学部のエ・フンソプ教授は25年の間、名称修正運動を行なっている。詳細については、文末のインターネット資料のブサモを参照。

がいたとしても決まった家がなく妻子を連れてまわった」〔鄭 2002: 114〕という。この点からするとポッタリは、負商というよりは、裾商の方に近い存在なのかも知れない。

またネットワークという観点から見ると、ポッタリチャンサは興味深い存在でもある。裾負商の場合には国の危機に際して活躍する側面を持つが、ポッタリの場合には活躍する範囲はごく狭く、せいぜい地域社会や多くは近隣関係、地域の在日コリアン同胞関係のレベルであるが、その中で様々な情報を流通させる役割も持っている。例えば、「日韓双方で何が流行っているかというような情報」や、「お見合い・結婚関係の情報」、「よく当たる占い師がどこにいるかといった情報」などを流通させている〔島村 2002: 8〕。

I ポッタリチャンサの歴史的背景

ポッタリチャンサのように日本と朝鮮半島を往復する行商人は、かなり昔からいたのではないかと考えられる。現在の国境が画定する以前にも、こうした人々の流れは当然あっただろうし、それは国境線が引かれた後においても続いた。国境は近代国民国家の所産である。国境が画定する以前には、当然のことながら往来は自由であった。しかし、国境が画定された後は、それを越える人の移動は越境と呼ばれることになった。

日本植民地期には、朝鮮は日本の「国内」とされた。日本から独立した後、韓国と日本との国交が正常化するまでは、両国間の越境は基本的に非合法であったが、人の流れは「密航」という形で続いた。例えば済州島について言うと、「ミカンを日本で買って、釜山から北のほうに持っていくと大変儲かる、また生ゴムを釜山から日本に運んでも大変儲かる」と聞いた。まだパスポートもなく許可もなしに、船で下関、釜山、対馬を行ったり来たりした時代だった

〔高 1998: 154・155〕。また、「対馬―釜山間でヤミの運び屋をした人によると、昭和 30 年頃に『一時期流行った商売や。洋服の生地とかを対馬から釜山へ運んで、連絡がきたら今度は人連れに』行ったりしていた。そういうヤミの運び屋が流行った時期の対馬には、『私が対馬にいる時分は、済州島の人ぎょうさんおった。今はほとんどいないみたい』ということである」〔高 1998: 185〕。以下、具体的に見てみよう。

1905 年に下関と釜山との間に関釜連絡船が就航した。これは 1910 年の日韓併合（韓国併合）により日本の国内路線とされた。その後 1945 年の日本の敗戦により閉航となった。しかし 1959 年には九州郵船の韓水丸が就航しており、1961 年には関釜連絡航路が再開された〔島村 2002: 4〕。この頃の話として、「永年、下関警察署ふ頭警備派出所に勤務した警察官によると、1962 年（昭和 37 年）には在日韓国人の『ポッタリ』さんを見かけたという」〔高島 1998: 186〕との記述がある。つまり日韓間に国交がなくとも若干の行き来はあったということである。その大部分は在日コリアンの帰郷や親族訪問などであろう。

日韓間に正式に国交が結ばれるのは1965年の日韓基本条約であるが、それを受けて1970年、関釜フェリーが就航する。この関釜フェリーを利用して、日韓の間を行き来する数多くのポッタリチャンサが生まれた。その後1989年には韓国人の海外旅行が完全自由化となり、それまでは圧倒的に日本側からであった人の流れに韓国側からの流れが加わることとなった。

運賃が安いということや、ほぼ毎日運行しているという便利さなどもあり、ポッタリが最も頻繁に利用しているのがこの関釜フェリーである。その後1990年には福岡と釜山の間に「かめりあ」（カメラライン株式会社）が就航し、翌1991年には福岡と釜山間を2時間55分で結ぶ高速船「ビートル」（九州旅客鉄道株式会社）が就航し、それまでの夕方出航し翌朝到着する関釜フェリーよりも大幅に時間が短縮されることとなった。そのため福岡と釜山の間では日帰りで十分行き来ができるようになった。

現在では下関を始めとする北九州地域だけではなく、大阪や金沢などといった他の地方への航路もできており、こうした航路でもポッタリがいるのではないと思われる。他方、航路だけではなく、関西地域では航空機を利用したポッタリの存在が確認されているが〔島村 2002: 11〕、安価かつ荷物を大量に運ぶことのできる航路に比べると航空機利用のポッタリは比較的小数ではないかと考えられる。

いわゆる「韓流ブーム」以降、日本から韓国への旅行者数は大幅に増えた。また韓国から日本への観光客数も全外国人観光客数の3分の1を占め、これは外国人観光客としては最も多い。それを反映して日韓間の様々な交通手段が発達してきたが、2008年10月の急激な円高とウォン安によって韓国人観光客のキャンセルが急増し、6月21日に就航したばかりの釜山と門司とを結ぶC&CRUISEの国際フェリー定期便「MOJI LINE」（モジライン）も10月27日に無期限運休となった。

II ポッタリチャンサの移動ルート

日韓間のポッタリチャンサの大部分は、日本では下関、韓国では釜山をその拠点とする。ポッタリの動きについて簡単に示したものが図1である⁵⁾。

図1の左上から時計回りに説明すると、まずポッタリは下関港の近郊にある店舗で品物を購入し、フェリーに乗る。そこで商品を一時使用状態に変え（もしくはパッケージを捨て）、自分の持つ携行品（もちろんこの中にも商品が多く含まれている）以外を他の旅客に預かってもらう。釜山に到着すると通関し、預かってもらっていた品物を引き取り（この際に旅客に謝礼

5) 移動手段は関釜フェリーもあるし、高島の指摘する一時使用だけではなく、パッケージ廃棄などもあるため筆者がこれらを追記した。

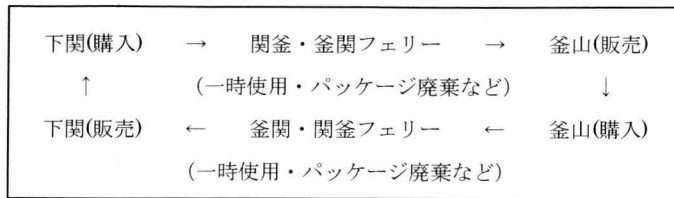


図1 ポッタリチャンサの移動ルート

出典：高島 [1998:176]

を渡す場合が多い)、港で待っている仲買いに品物を売る。または自分で近隣の店に持ち込んで商売をする。その後近くの店で品物を購入し、再びフェリーに乗り、日本から出た時と同じことを繰り返す。こうしたスケジュールの循環をポッタリは行なっている。ただ全てのポッタリがこのスケジュールで行動しているわけではない。中には日本から来て、売って買って、その日の便で日本へ戻るというハードスケジュールをこなす人や、1日位釜山で休んでから、次の便で日本に向かう人もいる。その他にも「気が向いたら、釜山にしばらく居続ける」人もいる[島村 2002: 10]。

III 売買される品物の変遷

ポッタリによって扱われる商品は、その時々流行により大きく変化してきた。先行研究からその一端を紹介すると、表1の通りである。

概ね、日本からは韓国においてニーズのあるもの、しかも日本の方が安く品質が良いものが条件で、韓国からも日本においてニーズがあり安い物が条件となる。これらをざっと見ると、70年代前半までは雑貨や衣料品などが日本から韓国へ行き、生活必需品ではない洋酒〔正確にはフェリーの免税店で購入されている〕やアクセサリなどが韓国から日本に行っている。次に70年代後半からは小型の家電製品が日本から韓国に行くようになった。90年代に入ると、梅干やごま油といった健康食品が日本から韓国に行っている。逆に韓国から日本には、90年代前半にはほとんどが衣類であったものが、後半以降は韓国の特産品である韓国ノリやトウモロコシ茶、朝鮮人参や辛ラーメンなどが行っている。

こうしたトレンドは今後も変化し続けていくと思われる。島村の調査から6年が経過しており、今現在どのようなものがメインに流れているのか、実態調査が必要である。

表1 日韓間で売買されるポッターリチャンサの商品の変遷

年月日	経路および品目	出典
1973年 9月	日本→韓国: 衣料品, 生地類, 化粧品, 薬品, ライター	高島 [1998: 177-178]
	韓国→日本: 布団, ビーズのハンドバック, 人形	
1974年 6月	日本→韓国: 衣料品, 雑貨類	同上
	韓国→日本: <洋酒>, ネックレス, 指輪	
1978年	日本→韓国: 電気冷蔵庫, 電気洗濯機, 電気レンジ, ミシン, 編機, テレビ, 電気卓上計算機, トランジスタ・ラジオ, ミニ・テーブルコーダー, 化粧品, 各種薬品, 電気カミソリ, 時計, 婦人服, インスタント・コーヒー, 紅茶パック	同上
1982年 10月	日本→韓国: 電気製品・カメラ・時計	同上
1987年 10月	日本→韓国: ヘア・ドライヤー(ナショナル), <ウイスキー(ジョニー・ウォーカー)>, 電気カミソリ(ソニー), 化粧品(資生堂), パラソル	同上
1989年 9月	日本→韓国: 化粧品、薬、家電製品	日経流通新聞
	韓国→日本: ニット製品、Tシャツ、アンゴラのセーター	1989年9月2日
1992年 10月	日本→韓国: ビデオ、炊飯ジャー	読売新聞
	韓国→日本: 下着、Tシャツ、ジーパン	1992年10月19日
1994年 10月	日本→韓国: ゴマ油、化粧品、炊飯器	朝日新聞
	韓国→日本: 絹のブラウス、辛ロラーメン、白菜	1994年10月19日
1996年 5月	日本→韓国: 電気炊飯器・梅干し・ゴマ油	高島 [1998: 177-178]
	韓国→日本: <酒, たばこ>, 衣類, 韓国風味付けノリ, トウモロコシ茶	
1999年 3月	日本→韓国: 炊飯器、CD ラジカセ、魔法瓶、ゴマ油、梅干し、お茶	朝日新聞
	韓国→日本: インスタントラーメン、ノリ、焼酎	1999年3月10日
2002年	日本→韓国: 玄米茶, 薬品, ごま油, 梅干, 高級果物, 下着, 毛皮, 衣類, 時計, ゲーム機, ウォークマン, 炊飯器, CD プレーヤー, ビデオデッキ	島村 [2002: 5, 8]
	韓国→日本: 衣類, タオル, インスタントラーメン, 海苔, 野菜, 朝鮮人参, 茶, <ウイスキー>, 焼酎	

注: <>でくくったものは, フェリーの免税店で購入されたものと考えられる。

IV ポッターリチャンサの行程

ここでは, 先行研究および筆者の経験に基づいてポッターリの商売の行程を紹介する。島村 [2002: 9-10] によれば, あるポッターリたちの一日のスケジュールは次のようであった。

13:00 下関で仕入れを終えフェリー待合室に集まる。荷物のとりまとめ。

15:30 通関、乗船開始

17:00 出航後、食事、花札、世間話、風呂、洗濯

早朝 釜山外港に到着、停泊

08:00 接岸、通関。仲買いに品物を売る。売り終えると国際市場周辺で日本に持ちこむ品物を購入

昼過ぎ 仕事を終え、再び港に戻る

17:00 出航

08:30 下関到着後、仲買いもしくは長門市場やグリーンモールに品物を売る⁶⁾。またスナックなどに直接ウイスキーを持ち込む

筆者は、かつてポッターチャンサの商売行程に同行したことがある。以下、そのさいの観察および会話を記す。なお、参考のため表 2 に 2009 年の関釜フェリーの運賃および時刻表を掲げた。

筆者は、1987 年 5 月に初めて一人で関釜フェリーに乗った。東京から JR 線の電車を乗り継いで下関へ行き、関釜フェリーに搭乗した。運賃が最も安い 2 等船室に行くとテレビがついており、NHK 総合が流れていた。2 等船室は雑魚寝である。学生割引を利用した料金は、片道 6 千円台だった。出発時間の 17 時前、だんだんと周りに乗客が増えてきた。周りから聞こえてくる会話に耳をすますと、話されている言葉は日本語と韓国語の混合であった。2 等船室の乗客のほとんどは中年から年輩の女性で、若いのは私くらいであった。

出発時間を待っていると、1 人のおばさんが声をかけてきた。彼女は自分のことを「みと〔水戸または三戸か。漢字は不明〕のおばちゃん」と名乗った。みとのおばちゃんは見たところ、年齢は 60 代で、すごく痩せていて背も低かった。しかし、真っ赤な口紅とマニキュア、金びかのネックレスと腕時計、目を見張るような大きな指輪、さらには金のブレスレットという派手な身なりに私は圧倒された。なぜか関西弁を上手に話す。

みとのおばちゃんは、「さあ兄ちゃんにも何か持ってもらおうかな。兄ちゃんいくつや？」と聞いてきた。私が「19 歳」と答えると、「未成年じゃ酒はあかん」ということで、ニコンのカメラ数台を預かることに決まった。無事に税関を超えられたら、カメラはみとのおばちゃんに返すことになっていた。やがて消灯時間となり、ざわざわしていた船内もすぐに静かになり、私も知らず知らずのうちに眠りについた。翌日未明に 1 度目が覚めた。釜山の外港に船は停泊しており、朝 8 時に税関が開くのを待っていた。月明かりで船内は青白く照らされていた。

6) リトル釜山とも言われる下関のグリーンモール商店街では、2006 年 11 月 25 日より韓国ウォンが使える（紙幣のみ）ようになった〔日本経済新聞 2006 年 11 月 24 日〕。

表2 関釜フェリーの運賃および時刻表

旅客運賃

等級	片道	往復
DELUXE (特等室)	18,000 円	34,200 円
1ST (1等)	12,500 円	23,750 円
2ND (2等)	9,000 円	17,100 円
1等 身障者・学生割引(30歳未満)	10,000 円	20,000 円
2等 身障者・学生割引(30歳未満)	7,200 円	14,400 円

手荷物運賃

1個(20kg)まで600円, 20kg以上:5kgごとに150円
 * 梱包していない品物は別途料金(例:自転車)

時刻表

出発地	乗船手続き受付	乗船	出港	到着
下関発	10:30~17:30	18:00~18:20	19:00	翌日 08:30
釜山発	10:00~18:00	18:00~18:50	20:00	翌日 08:00

出典:「関釜フェリー株式会社」のウェブサイト

朝、おばちゃんたちのけたたましい声で目が覚めた。おばちゃん達はみんな朝から元気であった。知らないうちに TV の番組は、KBS のニュースに変わっていた。8 時になると通関が始まった。ゲートを出ると、隅の方で荷物からカメラを出しておばちゃんに渡した。するとおばちゃんが一緒に来るようにと言って、電車で 1 駅移動した。駅から少し歩いたところにある食堂に入った。「兄ちゃん朝メシ食って行けや」と言われ席に座ると、韓定食が出てきた。私は「おばちゃんのは？」と聞くと、「おばちゃんは商売があるからな」と言って食堂の裏に消えていった。1 人で TV を見ながら食べていると、やがて食堂のおばさんいなくなり、店内には筆者だけになった。少し不安になったが、とりあえず全部食べ終わるとみとのおばちゃんが戻ってきて、8,000 ウォンと草餅を 1 袋くれた。「兄ちゃんありがとう。また頼むわ。困ったことがあったら『みとのおばちゃん』と言えば誰でも知つとるからな」と言われてそこで別れた。

約 2 ヶ月後の 7 月、筆者は日本人の友人と二人で再び関釜フェリーに乗った。2 等船室に行くと、またみとのおばちゃんがいた。おばちゃんいわく「兄ちゃんまた会(お)うたな。今度は何を持ってくれるんや?」。筆者を覚えていたのか分からないが、「確か兄ちゃん、酒はあかんかったな」とおばちゃんが言うと、友人が「こいつ今日 20 歳の誕生日なんですよ」と言っ

た。本当にこの日は筆者の誕生日だった。するとおばちゃんは、「そらめでたいな。じゃ今度は酒、大丈夫やな」とニヤリと笑って、シーバスリーガル 3 本を筆者に預けた。友人はカメラをいくつか持たされた。しばらくするとおばちゃんは、「今回おばちゃんと一緒に乗るはずやったおばさんが乗れなかったから、海苔巻きが余っとるんや。2 人で食べな」と言って私たちにくれた。こうしたやり取りを聞いていた日本人のおじさんが、フェリーの売店でビールを両腕に何本も抱えて買ってきて、「お祝いだ」と言って皆で宴会になった。このおじさんは、個人で日韓間の貿易をやっているということだった。翌朝、税関を超えて荷物をおばちゃんに返すと、筆者と友人それぞれにお小遣いを渡し、港で別れた。

以上、筆者の経験に基づいて、20 年前のポッターの様子を記述したが、おそらく現在は大きく変化していると考えられる。島村〔2002: 9〕によれば、「現在、ポッターは日本在住者よりも韓国在住の者のほうが圧倒的に多くなっている」という。島村の調査から 6 年が経過した現在では、こうした傾向はさらに進展しているのかも知れない。

IV ポッターリチャンサの利益

ポッターが得る利益は、一回で数十万円稼ぐ場合から数万円までさまざまである〔朝日新聞 2005 年 2 月 23 日〕。「一回の往来で 1 万円ほどが一般的な利益である」とも言われる〔朝日新聞 2005 年 1 月 14 日〕。

先行研究には、「ポッターを主要な生業とする人は、現在、日本側ポッターには少ないが、過去においては、これが主要な生業であったというポッターもいる」という指摘がある〔島村 2002: 5〕。もちろん彼・彼女たちにとっては、儲けがあるほうが良いのは間違いない。ただし、「儲けからなくても行く」ポッターがいることも指摘されている。

例えば、儲けがほとんどないのにポッターをやっている様子が示されている。簡潔にまとめると、1996 年に 65 歳のポッターが買ったものを売って 20,401 円の儲けを出したが、そこから往復のフェリー運賃、ターミナル施設利用料などを差し引くと 6,709 円にしかならないとある〔高島 1998: 180-182〕。これは「重い荷物を担ぎ、揺れる船で睡眠をとり、そして売り歩くことを考えれば決して楽な仕事ではない」〔高島 1998: 182〕。

また、こうした状況は、筆者による中国地方在住の在日韓国人一世の女性からの聞き取りからも窺えた。彼女は、「在日同胞の友人がポッターをやっており、それが羨ましくて仕方がない。自分もポッターをやりたいが、子ども達には反対されるし、釜山は遠い。でもポッターの話を知っていると自分もすぐにでも行きたくなる」と述べていた。彼女はポッターはやっていなかったが、在日同胞女性の間で肝油や化粧品の販売・斡旋などをやっていたことがあった。儲け

はほとんどなく、どちらかと言えば「持ち出し」、つまり損のほうが多かった。それでも子ども達に止められるまでその仕事をやり続けた。

お わ り に

先述のように、先行研究には、在日コリアンのポッターが減少し、本国の韓国人のポッターが増えているという指摘〔島村 2002: 9〕がある。

日韓間の在日コリアンのポッターが減少したことについては、いくつかの理由が考えられる。まず第1に在日コリアンのポッターの高齢化があげられる。先述した筆者の経験に出てきたポッター達は、当時の年齢は概ね50代以上であった。若い世代の人はいなかったと記憶している。それから20年が経過しており、その間調査された先行研究の記述を見ても、在日コリアンのポッターはかなり高齢化していることが窺われる。先に紹介した「みとのおばちゃん」がまだご存命であれば現在80代になっている。体力的にも大量の重い荷物を買ひ、それを持って船に乗り、降りてから商売をする、というかなりハードなポッターを続けていくことができるかどうか。それはかなり困難なことだと思われる。

第2にこうした高齢化にも深く関係しているが、ポッターの必要条件という点からも考えることができる。「こういったこと〔ポッターをすること〕は〔中略〕朝鮮語力も要求される」〔原尻 1989: 125〕。つまり商売をする上で、釜山において韓国語を自由に操ることができる、という条件である。この条件を満たす在日コリアンはその多くが1世である。民族学校に通う、あるいは他の様々な方法によって韓国語（ないしは朝鮮語）を身につけた2世以降の世代もこの条件を満たすとは考えられるが、どこまで世代交代がなされているのかといった研究・資料はこれまでのところまだない。つまり言語という資源を必要条件とするポッターは、在日1世の高齢化とともに減少し続けているという点が指摘できる。

第3に、本国の韓国人のポッターと在日コリアンのポッターとの属性の差が考えられる。本国の韓国人のポッターは、在日コリアンのポッターと比べると大きな違いがある。それは、在日コリアンのポッターのほとんどが女性であるのに対して、本国の韓国人のポッターには男性もいることである〔島村 2002: 9〕⁷⁾。また本国の韓国人のポッターは、一般に在日コリアンの

7) 1997年秋の通貨危機の翌年2月に就任した金大中大統領の行なった対策の結果、「失業者数は1年足らずで約3倍に。60代以上の女性が大半だったポッターさんの世界にも、職を失った中年男性が流れ込んできた。ポッター業務の研修機関まで誕生した」〔朝日新聞 1999年7月4日〕。「失業して、97年6月から乗り始めたという男性(41)は『妻子もいるし、何かやらなくちゃいけない。釜山から下関までは〔中略〕運賃も安いしね』と言う。釜山の建設現場で働いていたという男性(53)も、1年ほど前から毎日、乗船するようになった。冬場の仕事がほとんどなく、賃金も安いからだという」〔朝日新聞 1999年3月10日〕。

ポッターよりも若い。こうした現象は、先述の通り、1989年の韓国人の海外旅行自由化以降に顕著になり、在日コリアンのポッターが本国の韓国人のポッターにとって代わられていったと考えられるのである。

ところで、近年、韓国では、日韓間のポッターは減少しており、その代わり特に中国やロシアへのポッターが増えてきている、という話を釜山港の職員から聞いた。釜山の国際旅客ターミナルにおいて、ポッターが良く利用する（20年前はその乗客のほとんどがポッターであった）関釜フェリーのゲートを観察したところ、日本からの乗客の中に、明らかにポッターと思われる人々の姿はごく少数であった。『ロシアへのポッターチャンサ進出計画』や『担ぎ屋商売 金儲けして旅行する中国ポッター体験記』などといった書籍のタイトルを見ても、韓国から海外へのポッターのトレンドが大きく変化してきていることが窺われる。

なぜこうした変化が起こっているのだろうか。分断国家として常に北朝鮮と向かい合ってきた韓国は、かつての極端とも言える反共主義の時代から大きく変わり、1990年には当時の旧ソ連と、1992年には中国と国交を結んだ。どちらも大国であり、市場としての魅力は大きい。多くの韓国企業がこれらの国に進出し、その関係はますます深くなっている。こうした過程で生まれた新たな商売の土地において、ポッターがどのように活躍しているのか、今後、注目したい点である。

また釜山税関博物館長によれば、日韓間のポッターの減少には、最近の日韓の製品の変化が深く関係していると言う。近年韓国では電子機器などを中心とする製品製造能力が大きく発展し、今や台湾と並ぶ大きな力を持ってきた。日本でよく見られる電子機器、中でもコンピュータ関連の機器やパーツなどには台湾製はもちろんのこと、韓国製がかなり多くを占めている。こうしたことから、端的に言えば、韓国本国の商品の性能の向上に伴って、日本からの商品の魅力が減退したため、日韓間のポッターの有用性が損なわれてきたのではないかとの説明である。これは大変説得力のある説明であるが、今後の調査で明らかにしていきたい点である。

日韓間のポッターが減少した理由は他にもある。「韓国の人件費が高くなり、差額のうまみがなくなったため」、また「韓国が国内産業保護のために、日本の電気製品の通関検査を厳しくしたため」〔朝日新聞 1992年11月7日〕でもある。逆に「99年に日本製品輸入の足かせとなっていた制度が完全に撤廃された」ことが自由な競争を生み、ポッターの扱う品物が「正規の輸入品と値段が大差ないし、正規のはハングル表示もある」〔朝日新聞 2005年1月14日〕ということで、ポッターのメリットがなくなっているためである。さらに 2001年7月16

日に門司税関と博多税関支署は、それまでポッタリが扱ってきた商品の中でも韓国焼酎を免税の対象から外した。これは、正規の輸入業者からの苦情を受けての措置である⁸⁾。

こうして見ると、日韓間のポッタリ、特に在日コリアンのポッタリはいなくなってしまう可能性さえある。しかしながら、釜山の国際市場などに行くと、日本の菓子がほぼリアルタイムで店先に並んでいる。こうした商品はどのようにして運ばれているのであろうか。一般の物流にのって大規模な業者によって担われているのか、それとも規模は縮小しつつも従来通り、ポッタリが運んでいるのか。今後、明らかにしていきたい点である。

ポッタリは、国境を越えることを基盤とするトランス・ナショナルな生き方の一つの例である。本来は人と人、モノとモノとを区切るのが国境という境界である。しかしポッタリは、この国境があるからこそ儲け、生活を営んでいる。その姿からは、国境を利用する生活様式をみてとることができる。

参 考 文 献

〔日本語〕

大阪人権博物館・(社)大阪国際理解教育研究センター

1999 『聞き書き 在日コリアンの生活史』大阪:大阪人権博物館・(社)大阪国際理解教育研究センター。
高鮮徹

1998 『20世紀の滞日済州島人——その生活過程と意識』東京:明石書店。
斉藤弘子

1994 『韓国系日本人——マリア・オンマの軌跡を追って』東京:彩流社。
島村恭則

2000 「境界都市の民俗誌——下関の<在日コリアン>たち」『歴博』103: 16-19.

2002 「在日朝鮮半島系住民の生業と環境——ポッタリチャンサ(担ぎ屋)の事例をめぐって」『民具
マンスリー』35(1): 1-17.

高島淑郎

1998 「関釜フェリーの『ポッタリ』について」『社会文化研究所紀要』(九州国際大学)41: 175-187.

鄭勝謨

2002 『市場の社会史』韓国:韓国の学術と文化11(朝倉敏夫監修, 林史樹訳)東京:法政大学出版局。

原尻英樹

1989 『在日朝鮮人の生活世界』東京:弘文堂。

8) 韓国焼酎の場合、「これまで『個人使用』として認められた上限40本のうち7本が非課税で、33本分の税金は3,500円。これが16日から40本すべてが課税対象となり、税金は計4,300円になった。だが門司税関によると、〔中略〕『40本』にこだわる必要がなくなったため、逆に1人当たりの持ち込み量が増えたらしく、『大部分が3ケース、60本以上になっている』という」〔朝日新聞 2001年7月16日〕。

井出：ポッターチャンサ

栗本英世・井野瀬久美恵（編）

1999 『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』京都：人文書院.

〔韓国語〕

韓国精神文化研究院編集部

1991 『한국민족문화대백과사전（韓国民族文化大百科事典）』9, 京畿道：韓国精神文化研究院.

〔ウェブサイト〕

「関釜フェリー株式会社」

<http://www.kampuferry.co.jp/>（2009年3月7日参照）

「부관훼리（釜関フェリー）」

<http://pukwan.co.kr/>（2009年3月7日参照）

「부사모（フサモ：負祿商を愛する集まり）」

<http://www.bubosang.net/>（2009年3月7日参照）